

ビーチ再生

産業能率大学 小野田哲弥ゼミ

○三田裕美子 平山仁大 落合勇太 清水友菜

1. 問題意識

1.1 海水浴場の消滅と海水浴客の減少

日本の海水浴場は、川上のダム建設や海上・海岸建造物による潮流の変化等により浸食され、減少の一途を辿っている。

このような海水浴場の減少に加え、プールの増加、レジャーの多様化などにより、以前に比べて日本人は海水浴に行かなくなったとの報告もある。図1は九十九里町の海水浴客の推移データだが、冷夏だった平成15年(2003年)、東日本大震災に見舞われた平成23年(2011年)などの外部要因を除いても、明らかな減少傾向にあることが見て取れる。

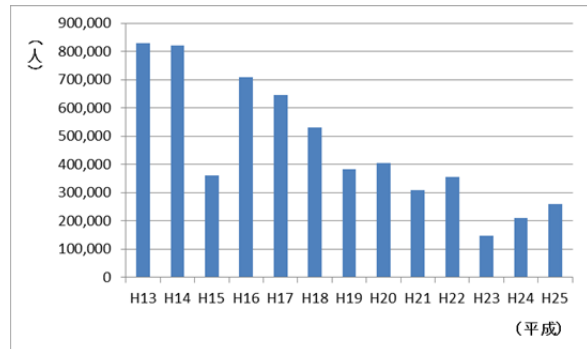


図1：九十九里町の年間海水浴客推移

この傾向が特定地域に限らないことは「種目別運動・スポーツ実施率の動向(上位10種目)」(笹川スポーツ財団2013)において、2000年には11.2%で6位だった海水浴が、2006年には6.9%で9位、2010年には10位圏外となっている調査結果によっても示されている。

1.2 政策実施が不可欠な日本の砂浜

2014年7月、私たちはインターネット調査会社を利用して、全国の1000人を対象に「砂浜とビーチスポーツに関するアンケート」を実施した。回答者の属性は20代・30代・40代・50代・60代それぞれ男女同数の均等割付とし、居住地は人口統計比率に準拠した。

表1：全国1000人アンケートの結果(抜粋)

質問文	はい	いいえ
島国日本にとって、自然海岸は貴重な財産だと思う	89.9%	10.1%
砂浜を裸足で歩くことは、健康に良いことだと思う	70.8%	29.2%
子どもにとって、海水浴は大切な人生経験だと思う	82.5%	17.5%

表1はその結果の一部である。日本人の大半が自然海岸を国にとっての貴重な財産と考え、砂浜での運動は健康増進効果があり、子どもの情操教育にも良いことを認識している。その一方で、同調査において「砂浜海岸や海水浴場に対するイメージ」も自由回答で尋ねたが、そこには、防災面(津波や高波が心配)、衛生面(水が汚く臭くてゴミが多い)、治安面(マナー違反が多くうるさい)などに関してネガティブな意見が数多く記述された。

このように、日本国民にとって砂浜の重要性認識はほぼ総意である。しかしながら、その現状は理想像とは大きくかけ離れているのだ。つまり日本のビーチは、多くの人々(社会)がその課題解決を願う対象であり、「政策」をまさに必要としている対象に他ならない。

2. インタビュー調査

現在も砂浜に対して様々な政策が実施されており、またこれまでも実施されてきたはずである。私たちが独自の政策提言を行うに当たり、それらの先行事例と現状を深く学ぶ必要性を感じた。そこで、実際に現場で日々課題と向き合い、多くの政策実施経験をお持ちの方々(表 2)にインタビュー調査を実施した。

表 2：インタビュー調査の実施記録

No.	実施日	訪問先 (*はメール回答)	部署・役職	ご担当者
1	2014/8/21(木)	茅ヶ崎市役所	農業水産課	矢野哲也 様
2	2014/8/27(水)	平塚市役所*	みどり公園・水辺課	佐藤智紀 様
3	2014/8/29(水)	藤沢土木事務所	なぎさ河川砂防部・なぎさ港湾課	佐々木常光 様
4	2014/9/4(火)	藤沢市役所	観光課	竹上直輝 様
5	2014/9/7(日)	NPO法人 Save the Beach	理事長・プロビーチバレー選手	西村晃一 様
6	2014/9/30(火)	日本ビーチバレー連盟	副理事長	川合庶 様
7	2014/10/20(月)	逗子市役所	観光課	池田祐一 様

インタビュー調査によって得られた知見は、大きく以下の 5 つにまとめられる。

- ①**養浜** 砂浜の浸食問題を解決するために行われている行政施策である。別の場所からトラックなどにより大量の砂を搬入する。コストはかかるが、砂浜は「天然の消波堤」でもあり、津波の軽減効果も期待できる。実際に茅ヶ崎市中海岸ではこの施策により、砂浜が最も後退していた箇所の砂浜幅を 10 年間で 50 メートル回復させることを目指し効果を挙げている。しかしながら、養浜をただ行えばよいというわけではない。誤った方法で行うと思わぬ惨事を招く。2007 年に西湘バイパスが台風の影響を受けて崩落したが、藤沢土木事務所の佐々木氏によれば、この原因は養浜によって潮流が変化しバイパスを支える砂が減少したためだという。養浜後の副作用など、多角的なシミュレーションを行った上での実施が不可欠だ。
- ②**景観** 津波対策としては、海岸に巨大なテトラポットを建設すればよいと思われるかもしれないが、現実はその単純ではない。それによって悪影響を受けるステークホルダー(漁業関係者、サーフィン愛好家、海水浴客、海の家経営者など)も存在するためだ。特に美しい景観を損ねることには慎重でなければならない。インタビュー対象の多くが、昨年(2013 年)世界文化遺産に登録された富士山を望む相模湾に面する湘南の都市であることもあり、その点は共通認識であった。また砂浜を綺麗に保つための社会実験も試行錯誤されている。茅ヶ崎市ではサザンビーチからゴミ箱をあえて撤去し、ゴミを持ち帰ってもらう施策が功を奏していると伺った。
- ③**衛生** 海水浴客が正しくゴミを持ち帰ったとしても、海が綺麗になるとは限らない。その一因はトイレにあるという。現在ビーチに設置されている公衆トイレの多くは汲み取り式のいわゆる「ポットン便所」であり、排泄物を一定期間溜めたのちバ

キュームカーで吸い上げる。しかし、その保管方法が万全ではないため、溜められた排泄物の一部は砂に浸透したり、海に漏れ出たりしているという。藤沢市では市費を投じて下水道を整え水洗化することにより、江ノ島を擁する片瀬海岸の美化に一定の成功を収めている。こちらも予算を必要とする課題はあるが、少なくとも多くの客で賑わう海水浴場では下水道設備の義務化が必要だと思われる。

④**SURF90** 現在、湘南地域がマリンスポーツやビーチスポーツの先進地域になっている背景として大きいのが、1990年に開催されたSURF90こと「相模湾アーバンリゾートフェスティバル1990」である。民間団体と企業等が共同で財団を作り、人と海の共生を目指して相模湾沿岸の各所で大々的かつ華やかにイベントを開催した。SURF90では、海の事故から海水浴客を守るための救助法やパトロールの訓練等も行われ、それが発端となったボランティア活動が現在まで続いている。日本ビーチバレー連盟の川合氏によれば、平塚市の「湘南ひらつかビーチパーク」が日本におけるビーチバレーの聖地となっているのもこのイベントのおかげだという。バブル全盛の当時とは時代背景が異なるが、地域を限定した「ビーチ特区」のような政策の可能性や、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に代表される社会的一大イベントとの連携が効果的であることを学ぶことができた。

⑤**多様性** イベント等によって多くの観光客を呼び込むことができれば、その経済効果は計り知れない。その反面、地域住民は騒音や治安悪化といった諸問題に悩まされることになる。今年(2014年)、この点に関する施策として賛否両論かまびすしかったのが逗子市である。逗子市は条例によって、海の家営業時間短縮、スピーカーによる音楽や飲酒、入れ墨の露出などの禁止を厳格に定めたからである。この条例施行の結果、風紀は劇的に改善された一方、来場者数は半減し、観光関係者は悲鳴を上げた。しかし市民の多くはこの条例の継続を望んでいるという。この点についてNPO法人Save the Beachの西村氏に尋ねたところ「多様性が重要」との見解であった。つまり、どの地域にも当てはまる万能の策ではなく、そのつど地域住民の意見を最大限尊重した施策が望まれるということだ。政策に対しては必ず賛否両論あり、また必要に応じて柔軟に変更していく重要性を教わった。

3. 政策提言

3.1 ビーチ再生100年構想

私たちは上記インタビュー調査により、日本における砂浜海岸の価値と、政策実施の必要性を再確認することができた。「ビーチ再生」は非常に大きな政策課題であるため、Jリーグの「百年構想」をモチーフに、「ビーチ再生100年構想」として以下を提言したい。

- 海への畏敬の念と海の恵みに感謝することを忘れず、美しい景観を後世に残す。
- 日本のビーチを、様々なレジャーやスポーツを楽しむことのできる、憩いの場にする。
- 「観る」「食べる」「参加する」。ビーチを通して世代を超えた触れ合いの輪を広げる。

3.2 具体的施策としてのニュースポーツ「地引網」の普及案

上記「ビーチ再生 100 年構想」は長期的なプランだが、具体的な施策の一つとしては「地引網」の普及を挙げたい。その理由は、地引網は子供からお年寄りまで幅広い世代が気軽に参加できるスポーツであり、団結力や達成感が生まれる。また、獲った魚を自身で調理することにより、仕事(就業)の大変さや生命の尊さを学ぶことができるからである。

その他にも数多くのメリットが期待される。魚とともに陸上げされることになる大量のゴミを目の当たりにすることにより、海が人の手によって汚されている現状と、ゴミのポイ捨てがいかに罪深い行為なのかを自覚できる。毎年恒例で行えば、環境モニタリングにもなり、地域で連携して年々ゴミを減らし、漁獲量を増やす良い動機づけにもなる。

特に小学生の修学旅行時のアクティビティの一つとして導入すると有意義だと考える。地引網およびビーチスポーツ体験をしてもらうとともに、海洋汚染や津波被害について学ぶ機会になるからだ。その他、夏休み等に親子教室を開くのも有効だろう。体験型で親子の絆が深まるだけでなく、スポーツをすることの楽しさを体感し、環境問題や防災意識を世代間で共有できる。このように親から子へとビーチ再生意識が代々受け継がれていけば、100 年後の日本では、きっと綺麗な砂浜で盛んにスポーツが行われているに違いない。

3.3 ビーチ再生で世界をリードする日本へ

熱中症予防のために昼間の練習が制限され、水質汚濁によってマリンスポーツの実施が危ぶまれるなど、環境問題がスポーツの実施を左右する時代に突入している。またビーチは、すでに盛んなビーチバレーやビーチサッカーをはじめ、既存スポーツを緩衝効果のある砂の上で、より安全に実施できる可能性も秘めている。ビーチスポーツは海と日差しを抜きには存在しえないスポーツだからこそ、他の競技以上に環境問題に敏感な意識を生む。

津波被害と隣り合わせの地震大国であり、また海水面の上昇を引き起こす地球温暖化対策を京都議定書(1997 年)として世界で初めて明文化した国際会議のホスト国として、さらに 2020 年夏のオリンピック・パラリンピック大会の開催国として、スポーツそして環境分野で日本が世界を先導できるよう、私たちはこの「ビーチ再生」政策を力強く提言する。

<資料・文献>

千葉県商工労働部観光課 (2002-2014) : 「海水浴客等入込状況」,

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kankou/toukeidata/kaisuiyoku/index.html>.

日本プロサッカーリーグ(1996) : 「J リーグ百年構想」, <http://www.j-league.or.jp/100year/>.

笹川スポーツ財団 (2013) : 『スポーツアカデミー2012 報告書』.

首相官邸総合海洋政策本部 (2007) : 「相模湾アーバンリゾートフェスティバル 1990 の取組み」, http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kaiyou/enganiki/houkoku/h_sagamiwan.pdf.

逗子市 (2014) : 「安全で快適な逗子海水浴場の確保に関する条例及び施行規則」.

<謝辞>

お忙しいところ、私たちのインタビューを快くお受けくださった皆様に感謝いたします。